

第7章 失業

マクロ経済学



教員：奴田原 健悟

<http://www.kengonutahara.com/teaching>

第7章のアウトライン

第7章の授業でやること

- ▶ 長期での失業を説明する理論
 1. 摩擦的失業
 2. 硬直的賃金

教科書との関係

- ▶ 「マンキューマクロ経済学Ⅰ(入門篇)」(東洋経済新報社)の第7章7-2、7-3

失業の理論

長期（第3～6章）では、失業は起きなかった

- ▶ 賃金が _____ で、労働者や仕事が同質かつ完全な労働市場が存在するとき、失業は存在しない
- ▶ 現実のデータでは、長期的にみても失業は存在する

本章では、「長期での失業」を説明する理論を扱う

職探しと摩擦的失業

(frictional unemployment) :

- ▶ 求人と求職者の _____ に時間がかかることで発生する失業

賃金が _____ で、かつ求人が十分にあっても、摩擦的失業は存在

原因

- ▶ 労働者の能力や選好の違い
- ▶ 仕事での求められる能力の違い
- ▶ 労働者の地理的な移動の難しさ
- ▶ 求人や求職者の情報はすぐに伝わらない

公共政策と摩擦的失業

摩擦的失業を減らそうとしている政策：

- ① 求人検索支援：求人と求職者のマッチングを促進するための、求人情報の提供
- ② 職業再訓練プログラムへの公的補助：成長産業への労働者の移動促進のため（職業訓練校、ポリテクセンターなど）

(意図せず) 摩擦的失業を増大させている政策：

- ▶ 失業保険 (unemployment insurance)：
失業した後の一定の期間、雇用されていたときの賃金の一部を政府が給付してくれる制度

失業保険の影響

1. _____ を低下させる

- ① 失業することの経済的コストが減少する
- ② せっかく職を見つけても、魅力が低い場合はその職を断ることが多くなる

2. _____ を増加させるかもしれない

- ▶ 失業しても所得が保証されているため

失業保険のベネフィット :

- ① 労働者の所得の _____ を低下させる
- ② 魅力の薄い職を断ることで、労働者がより自分に適した仕事に就くことが可能になる

実質賃金の硬直性と失業 (1/2)

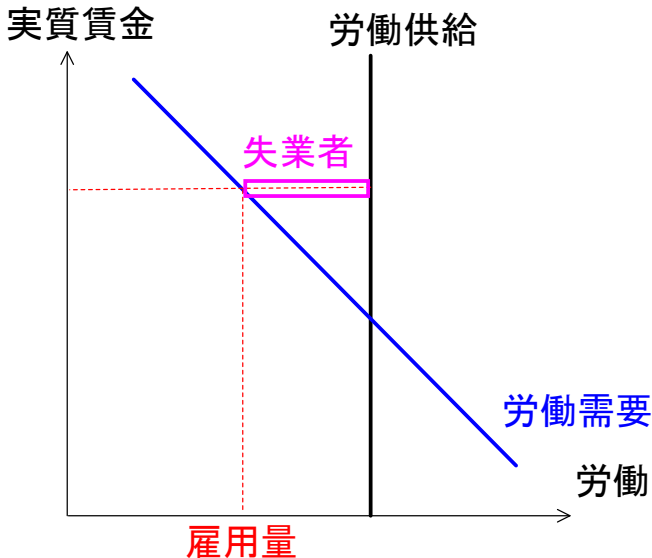
実質賃金の _____ : 賃金が需給一致水準まで
すぐには調整されないこと

⇒ 賃金が均衡水準より高いと
労働供給 _____ 労働需要で、失業者が発生

なぜ賃金水準が高い水準にとどまるのか？

- 1 最低賃金法
- 2 労働組合の独占的交渉力
- 3 効率賃金

実質賃金の硬直性と失業 (2/2)



1. 最低賃金法

法律で賃金の最低水準を決めること

- ▶ 一般に最低賃金は、多くの労働者の均衡賃金水準より十分に低く、失業率の大部分は説明できない
- ▶ しかし、非熟練労働者や 労働者などの
均衡賃金水準よりも高い可能性がある

(※但し、現実の効果は、学者の間でも意見が分かれている)

[ケーススタディ] 1996年9月に、アメリカの最低賃金が、4.25ドルから4.75ドルに引き上げられた

	10代	シングルマザー	全体
96年7-9月	16.6%	8.5%	5.3%
97年1-3月	17.0%	9.1%	5.3%

3. 効率賃金の理論

(efficiency wage) : 均衡の実質

賃金よりも高い水準の賃金を払うことは、
にもメリットがある

- 1 仕事の魅力が増え、能力の高い労働者が集まりやすくなる
- 2 離職を減少させる（新規雇用や訓練のコストが減る）
- 3 高給の労働者は解雇されたときのコストが高くなるので、まじめに働くようになる
- 4 （発展途上国では）労働者の健康状態を改善する